



マレーシア滞在生活をふりかえって

田 中 稔*

1. はじめに

三菱化成工業とマレーシアの現地資本の合併である希土鉱石処理会社に、昭和53年の夏から4年間出向し、家族ともどもマレー半島西部にあるイボという町に居住した。その時の仕事や日常生活を通して感じたことを記述した。

2. マレーシアについて

最近では、日本でも ASEAN 諸国のことについて新聞、テレビでいろいろなことが紹介され特に、マレーシアはマハティア現首相になって数年来“ルック・イースト”政策と称して、日本、韓国の良い点を見習おうと国民に号令をかけている。日本とほぼ同じ国土と2,000万人弱の人口を持ち、錫、石油などの天然資源も豊富で、また恵まれた太陽光の下にプランテーションによるゴム、パーム・オイルの生産となかなか恵まれた国である。この国の大きな特徴は、マレー人、中国人、インド人から成る複合民族国家であることである。マレー人と中国人がほぼ拮抗し、インド人が15%位の構成比率で、各民族がそれぞれの言葉、宗教、伝統、生活様式を持って一つの国に住んでいる。国教は回教であり、公用語はマレー語であるが、旧英国統治領の影響で英語が第二の共通語となっている。この国でいろいろな活動をする上で重要な影響を及ぼすものに「ブミプトラ政策」と称されるものがある。ブミプトラとは、マレー語で大地の子という意味で、マレー人のことを指す。従来、中国系によってにぎられてきた経済を人口比率に応じたものとし、民間隔差をなくそうとするもので、企業の資本構成、雇用、高等教育な

どマレー人に対する優遇政策が取られている。

3. 日常生活

われわれの住んでいたイボという町は、首都クアラルンプールと観光で有名なペナンとの中間にあり、錫の産地の中心地として栄えてきた町である。われわれの現地のパートナーが錫鉱に携わる中国系であるので中国人とのつきあいが多かったが、ここに住む中国人は広東人で、非常に美味しい広東料理が味わえる。夜の会食は、この広東料理を前に丸いテーブルを囲み、コニャックの水割りを乾杯という意味の“飲勝（ヤム・セン）”と皆で唱和しながらガブガブ飲む。ただし、無理強いはいらないし、みっともなく酔っ払う人もいない。というのは、ビジネスマンにとって、こういう席で役人、銀行家、商社マンと知り合いとなり、ビジネスの重要なきっかけとなるからであり、また信用第一の世界で夜の席での失敗も命取りとなる。いきなり夜の話となったが朝は近くのモスクからのコーランによって眼をさまされる。日用品や食料品はスーパーマーケットで買えるが、生鮮食品は朝市に行く。日本では買物は主婦にまかされているが、美味しい料理は良い材料を選ぶことが肝心と、一家の主が出かけてきている姿を多く見うける。われわれが慣れるまでしばらくかかったのは、ブタ肉鶏肉の買いものである。肉屋の前にブター一匹がその姿のままデーンと置いてあり、ほしい個所を、ここ何g下さいと言って買う訳である。また鶏は生きたまま竹カゴの中におり、良さそうなものを指名すると、しめて羽根をむしってくれたもの、むろん頭も足も全部ついたものを買ってくる。その他、ヤギの生首なども店頭で並んでいたりする。これらは、すべて新鮮な材料を求めるという発想からだと思うが、彼らは食について非常に重きを置いて

*田中 稔 (Minoru TANAKA), 三菱化成工業株式会社, 総合研究所, 炭素無機研究所, 主任研究員, 修士, 応用化学

いる。

複合民族国家であり、特にマレー人は回教徒であり、ブタや両生類を食べない。パーティーでも2本立ての献立が必要である。一度、中華料理店で社員全員の会食を行ったところ、一騒動起きたことがある。マレー人用にはモスリム料理を出前してもらったのであるが、食器やテーブルがけがれているから食べないと言い出すマレー人社員が出て、なだめるのに苦労した。赤道直下の常夏の国で、もちろん一年中夏であり、四季のある日本から行くと単調であるが、それを救ってくれるのがマンゴ、ドリアンマンゴスチンなどの果物である。これらの果物はシーズンがあり年2回出回る。また、各民族のお正月や祭でしょっちゅうパーティーに招かれ、彼らの儀式や衣裳などが好奇心旺盛なわれわれを満足させてくれた。

家庭生活の方であるが、妻は女中を使うのに苦労し、4年間に10人近く変わった。中には盗癖や近所に悪口を言いふらすようなものもいたが愛すべき人々が多かった。妻は電子オルガンの教師の資格を持っていたので、イポの日系の音楽教室の現地の先生達の指導をたのまれ、その関係からずい分いろいろな人との交際が広がり、充実した生活を過ごせたようである。娘たちは英国婦人が校長のイングリッシュスクールの幼稚園、小学校に通っていたが、先生達は藤のムチを持ってのなかなかのスパルタ教育のようであった。運動会でも入賞した生徒達は賞状、賞品が与えられるが、参加賞ごときものは一切なく、いくつもの賞品をもらう子と、まったく何ももらえない子がいる訳で、この辺も日本と違うなあと感じたものである。

4. 日本との比較

町には自動車、オートバイ、家電製品はもちろんのこと、日用品に至るまで日本製品が氾濫し、新聞やテレビでも毎日のように日本の話題が出て、日本の影響力は非常に大きいことが感じられた。戦争中、数年間日本の統治時代があり、片言の日本語を今でも覚えていて、兵隊さんにゲンコツをもらったとか話してくれる年配の人もいたが、反日感情もなく、逆に日本人に

対し一種の尊敬の目で見られている感じがした。しかし、ここは長い間英国統治が行われていたので、まだまだ英国の影響力が大きく、大きなプランテーションや錫鉱山には英国人がおり、彼らは20年以上居住しているとのことである。この国の若い人達の留学先も英国や旧英国領が多い。年配の人に言わせると、英国統治時代の方が行政などすべてきちっとして生活しやすかったと述懐してくれたり、いまだに畏敬の念を抱いており、さすがに長い歴史を経た植民地政策だけのことはあると感じた。

これに対し、日本の海外進出は日も浅く、地元との摩擦を生じたり、駐在員の滞在期間も短く、現地の人々とのつき合いもそれなりのこととなり、彼らに見習うところがあるのではなからうか。

日本人の場合、共通の価値感などをもって以心伝心のようなところがあるが、多民族が同居しているこの国ではそんなことは到底無理であり、言葉ではっきりと主義主張を表わさないと何事も進まない。困っていることがあれば、言えば親切に助けてくれる。エリート層とブルーカラーの労働者の所得格差は大きく、つきあいの範囲も異なり、ある意味での階級社会である。また、宗教の違いや食物、習慣の違いから異民族間の結婚はほとんどなく民族間の対立の解決法を、混血による単一民族化ということは期待できない。すなわち、民族間及びその同一民族の中にも格差があり、政府の「ブミプトラ政策」に対するマレー系以外の国民の不満など極めて複雑である。これに対し国民の大部分が中流階級意識という、まったく対照的な日本と自分の体験による比較ができたことは有益であった。

5. おわりに

常夏の国ではそれなりの生活テンポがあり、バタバタと人が走ったりすることがない。赴任当時、会社の門に自動車をつけると門衛がゲートを開けるのに緩慢な動作で時間がかかり、何故走ってこないのかとか、プラントの建設当時工業者にスケジュールを守れと毎日うるさく言っても、「トライ マイ ベスト」と返事す

るだけで、いっこう気にしていない連中にイライラしたものであるが、4年後の帰国前には、別に走る必要もない、なぜ日本人はバタバタ走るのかという意識に変わっていた。帰国後、数カ月は日本の几帳面で気の抜けない環境にリズ

ムが合わず、南方ボケをしたかと心配したりした。今ではマレーシアのゆっくりした時間の流れがなつかしく思われ、日本のこの急激な流れが、人間の幸に、本当に必要なのかを考える今日この頃である。

